
英国ケンブリッジ大学女子学寮と International Women's Day

志渡岡 理恵

1. はじめに

19世紀後半の英国において女子高等教育の先陣を切ったケンブリッジ大学の女子学寮は、時代の動きに合わせて変化し続けている。1869年に創設されたガートン・カレッジ(Girton College)と1871年に創設されたニューナム・カレッジ(Newnham College)は、1948年によりやく女子学生に大学のフル・メンバーシップが認められるまで闘い続けたが、ニューナム・カレッジが現在も女子学寮である一方で、ガートン・カレッジは、1885年に創設された女子学寮ヒューズ・ホール(Hughes Hall)と共に、1970年代に共学となった。また、1954年には新たな女子学寮マレー・エドワーズ・カレッジ(Murray Edwards College)が、1965年には成人女性のためのルーシー・キャヴェンディッシュ・カレッジ(Lucy Cavendish College)が創設された。ルーシー・キャヴェンディッシュ・カレッジは、2021年から共学化し、18歳以上の男女を受け入れる予定である。

本稿は、1871年から現在まで続く最古の女子学寮ニューナム・カレッジの過去と現在の取り組みに注目し、特に21世紀の国際女性デイに行われた活動に焦点を当てる。ニューナム・カレッジは、女性解放運動の歴史を踏まえ、今なお残るジェンダー格差を是正するべく、国際女性デイに様々な企画を立てている。本稿の目的は、こうした活動の背景にあるニューナム・カレッジの女子(高等)教育の理念と実践のありようを、英国女子教育の歴史を踏まえながら、明らかにすることにある。

2. ケンブリッジ大学女子学寮の歴史

ニューナム・カレッジは、1870年にケンブリッジ大学で女性のための講義が始まったことを契機に誕生した¹。遠方に在住する女子学生が大学の講義に出席するために大学の近くに住む場所が必要となり、1871年、後の女性参政権運動家ミリセント・フォーセツト(Millicent Fawcett)に請われ、哲学者ヘンリー・シジウィック(Henry Sidgwick)が家を貸し、

アン・クラフ (Anne Clough) にその管理を任せた。こうして、ニューナム・カレッジは5名の女子学生からスタートした。

ニューナム・カレッジの創設によって女子学生が手にしたのは、静かに学べる環境と本だった。1875年に行われたヨークシャーでの会合で、クラフは、支援者たちに向け、女性が誰にも邪魔されない自分の部屋と必要な本を持てるようにしようと呼びかけた。20世紀を代表するイギリスの女性作家ヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf) は、フェミニストとしての代表作『自分だけの部屋』 (*A Room of One's Own*, 1929) において、女性が精神的・経済的に自立するには自分だけの部屋と500ポンドの年取が必要だと説いたが、その約50年前にすでにクラフは、女性がひとりで思索できる個室を持つ必要性を認識していたことになる。女性に開かれた職業がガヴァネス以外ほとんどなく、結婚して妻・母になることのみを奨励されていた当時の状況にあっては、中産階級以上の家庭の娘であっても、学問に集中する環境を自宅で確保することは困難だった。そのような事情もあり、女子学寮の需要は高まり続け、建物が次々に建てられ、徐々に設備が整えられていった。

同時期に創設された女子学寮ではあるものの、ニューナム・カレッジとガートン・カレッジでは教育方針が異なっていた。19世紀中葉まで、中産階級以上の家庭の娘は、家庭でガヴァネスによる教育を受けるのが一般的だったため、身につけている知識はばらばらで、育った家庭によって大きな差があった。ニューナム・カレッジでは、女子学生の状況に合わせてカリキュラムを変えろという実際の段階的なアプローチが採られた。やがて1875年以降、女子中等教育機関が次々に設立され、オックスブリッジの女子学寮出身者がそれらの学校の教員になり、女子学生の教育水準が上がっていくにつれ、ニューナム・カレッジも徐々に男子学生と同レベルのカリキュラムへと移行していった。

一方、ガートン・カレッジでは、設立当初から女子学生にも男子学生と同じ内容の教育を行うという方針が採られた。これは、創設者であるエミリー・ディヴィス (Emily Davies) が、女子学生が男子学生と同じタイムテーブルで同じカリキュラムをこなすことによつてのみ男女平等と言えると考えていたからだった。また、1885年創設のヒューズ・ホールは、女子の大学院生に特化したカレッジという点が他とは異なっていた。

このように、多少の方針の違いはあれ、女子高等教育の環境は次第に整っていったが、女子学生への学位授与はなかなか認められなかった。女子の学位取得には根強い反対があり、女子学寮は長い闘いを強いられることとなった。女子学生たちは、長きにわたり、何を学んだのか記録されている証明書を所属学寮から取得することしかできなかった。女子学生の学位取得を実現するための最初の試み (1887年) と2度目の試み (1897年) はともに失敗に終わった。

しかし、第一次世界大戦が大きな転機となった。第一次世界大戦の影響でオックスブリッジは初めて国から援助を受けざるを得ない状況になり、また、多くの女子学生たちが戦争協力したことが評価され、オックスフォード大学は1920年に女子学生の学位取得を

認めた。一方、ケンブリッジ大学はそれに倣わず、第二次世界大戦を経てようやく1948年に学位取得を含む大学のフル・メンバーシップを女子学生に認めた。イギリスでは最も遅い実施であった。それに加え、ケンブリッジ大学は1981年まで女子学生の数を制限する権限を保持していた。オックスブリッジがここまで女子学生の学位取得に抵抗したのは、大学の意思決定組織のメンバーになるには学位が必要という事情も関係していたと考えられる。

1954年には、新たに女子学寮マレー・エドワーズ・カレッジが創設された。マレー・エドワーズ・カレッジのホームページには、女子学寮である理由について、「あまりにも多くの女性たちが、業績を認められない、発言に耳を傾けてもらえないことを経験している。ジェンダー間の不平等が今なお存在しているという事実が、女性の学び・仕事と人生への準備に特に力を入れる学寮が依然として必要な理由のひとつである」と書かれている。ここには、女性が差別される状況が続いている限り、女子学寮は必要であるという認識が示されている²。

1965年には、成人女性のための女子学寮ルーシー・キャヴェンディッシュ・カレッジが設立された。現在ホームページには、その特徴が10点挙げられている³。その中には、ヨーロッパで唯一の21歳以上の女子学生のための女子学寮であることや、6大陸61か国から集まった370人の学部生と大学院生を擁する国際的な学寮であること、就いていた職業とは異なる分野の専門家になることを目指す女性たちを成功へ導く手助けをしてきたこと、毎年、作家の卵を対象とした小説賞を企画したり、女性アーティストのためのフェスティバルを開催したりしていることなどが含まれている。

現在、ケンブリッジ大学には31の学寮があり、そのうちの3つ（ニューナム・カレッジ、マレー・エドワーズ・カレッジ、ルーシー・キャヴェンディッシュ・カレッジ）が女子学寮である。同大学では、1970年代を境に共学の学寮が増えていった。1965年に初めて共学の学寮が創設されると、1970年代には3つの男子学寮が女子の学部生を受け入れ始めた。また、女子学寮ヒューズ・ホールも1973年から男子学生に門戸を開き、1978年には最古の女子学寮ガートン・カレッジが共学の道を選択した。

ケンブリッジ大学学寮におけるこの共学化の流れは、中等教育機関の共学化の動きと連動していたと考えられる。堀内真由美によれば、イギリスでは1944年に教育改正法が成立し、教育の機会均等が推進されて、公立中等学校では能力別なし男女共学が原則となった。その原則が定着したのが1970年代であった(堀内 92)。

最古の女子学寮のひとつニューナム・カレッジは、このような共学化の波には乗らず、今なお女子教育に力を注ぐ学寮として独自の道を歩んでいる。次節では、女子教育に重点を置くニューナム・カレッジの現在の取り組みに目を向ける。

3. 現在のニューナム・カレッジの取り組み

現在ニューナム・カレッジは、あらゆる分野の学生と教員で構成され、様々な専攻の学生と教員と一緒に生活することで学際的な視点を養うことを目指している（図版1）。2019年時点では、学部生370名、院生・ポスドク285名、アカデミック・スタッフ70名が在籍している。

ニューナム・カレッジの公式ホームページでは、所属学生に対するサポート体制が5つに分けて紹介されている。1つ目はアカデミック・サポートである。学問面で学生をサポートする指導教員(Director of Studies)が、1学期に少なくとも2回学生と面談を行う。指導教員は学生から期末レポートを受け取り、学生と議論をして建設的なフィードバックをする。また、ライティング専門の教員(Writing Fellow)が学期中は週に2回カレッジに来て、一対一で学生にライティングの指導を行う（メールで各自予約）。学生は、論文の構成の仕方や文法、推敲の手順などについて相談することができる。ライティングに特化した教員が配置されていることから、ニューナム・カレッジでは書く力を重視していることが分かる。この姿勢は、後で詳述するように、数々のエッセイ・プライズを企画しているところにもうかがえる。

2つ目はパストラル・サポートである。1人の学生に、学生の専攻とは異なる分野の1人のチューター(Tutor)がつき、健康面から経済面まで、学生生活に関するすべての事柄についてアドバイスする。1人のチューターが担当する学生は35人以上にならないようにして、細やかな対応が可能な体制を整えている。異なる分野の教員を割り振っているのは、学生が近視眼的にならないようにするための工夫であるとともに、学生がコース変更の相談などもしやすい環境をつくるための配慮だろう。

3つ目はキャリア・サポートである。60人の卒業生から成るグループが、各学期にワークショップを開催し、プレゼンテーションや履歴書、面接に関してアドバイスをを行う。また、現役生と卒業生のネットワークを構築するためのネットワーキング・ランチが開催され、学生は同じ専攻の卒業生に職業選択について相談することができる。さらに、インターシップやボランティアのサポートを行ったり、各分野の最前線で活躍する女性を招く学寮長主催のセミナーを開催したりしている。他にも、ニューナム・カレッジでは経済支援や障害者支援も充実させている。

これら5つのサポートに加え、ニューナム・カレッジは、多くのエッセイ・プライズを設けている。分野は、生物学、工学、歴史、言語学、音楽、哲学、自然科学と多岐にわたり、応募資格は、イギリスの12歳のすべての女子生徒にある。生徒は選択した1つの分野につき1作品しか応募できない。また、1つの学校は各分野5作品しか応募できない。第1位に選ばれた作品には400ポンド、第2位には200ポンド、第3位には100ポンドが授与される。

これらのエッセイ・プライズの中で目を引くのは、第2節で言及した作家ヴァージニア・ウルフの名を冠したウルフ・エッセイ・プライズ(The Woolf Essay Prize)である。これは、女子生徒に女性と文学、歴史、社会、文化の関係について考え、リサーチを行い、エッセイを書く機会を提供することを目的とした文学賞で、ウルフの『自分だけの部屋』から幾つかのパスセージが引用され、それに関する問い(テーマ)が提示される。『自分だけの部屋』は、ウルフが1928年にニューナム・カレッジとガートン・カレッジで行った講演をまとめたもので、フェミニストのバイブルとして現代まで読み継がれている。この文学賞には、ニューナム・カレッジがウルフに対して抱く敬意が表れている⁴。

さらに、ニューナム・カレッジは、ウルフからインスピレーションを受け、文学関係の稀少書や手紙、原稿、写真の寄付を募集してアーカイブ(Literary Archive)にする企画を2011年に立ち上げた。その目的は、これらの資料を展示することにより、学生の創作意欲を刺激することにある。ホームページでは、エイミー・レヴィ(Amy Levy)やA.S.パイアット(Byatt)、マーガレット・ドラブル(Margaret Drabble)、アリ・スミス(Ali Smith)らをはじめとするニューナム・カレッジ出身の著名な作家の名前が列挙され、これからも作家養成の伝統を継承していくという決意が表明されている。

また、ニューナム・カレッジでは、国際女性デイに様々な企画を実施している。国際女性デイは、毎年3月8日に世界規模で行われる女性の政治的解放を目指す統一行動日である。1910年8月に開催された第2回国際社会主義女性会議で国際女性デイの開催が決議され、以後各国で実施されている。当初は、各国の実情に応じてそれぞれ開催日を決めていたが、1921年6月に開かれた第2回国際共産主義女性会議で、ロシア革命の発端になったペトログラードの女性デイを記念し、3月8日に統一することが決定された。国連では国際婦人年(1975年)に、3月8日を国際女性デイと定めた。

2016年3月8日には、ホームページに「ハッピー・インターナショナル・ウィミンズ・デイ」(“Happy International Women’s Day”)と題された記事が掲載され、ニューナム・カレッジ所蔵の「ケンブリッジ・アラムニー・バナー」(“The Cambridge Alumnae Banner”)の歴史が写真入りで紹介された。記事によれば、このバナーは、メアリ・ラウンズ(Mary Lowndes)がデザインし、ニューナム・カレッジとガートン・カレッジの学生たちが制作したもので、ステンシルで刷られたアイリスはニューナム・カレッジを、ヒナギクはガートン・カレッジを象徴している。1908年6月13日の女性参政権運動の行進では、ケンブリッジ代表団がこのバナーを掲げて参加し、それ以来1913年まで何度もこのバナーは女性参政権運動の行進に使用された。また、1998年に行われた女子学生学位取得記念式典では、ケンブリッジ大学の学位授与式場セネット・ハウス(Senate House)にこのバナーが展示された(図版2, 3, 4, 5)。

それに加え、2016年の国際女性デイには、ニューナム・カレッジのオールド・ラボ(Old Labs)において、著名な女性参政権運動家コンスタンス・リットン(Constance Lytton)を題

材にした劇が上演された（図版6）。『オックスフォード英国人名事典』（*Oxford Dictionary of National Biography*）によれば、コンスタンス・リットン（Constance Lytton）は1869年、イングランド南東部ハートフォードシャーに地所を所有する貴族の次女としてウィーンで生まれた。父親が外交官だったため、彼女は幼少期をパリ、リスボン、インドなど世界各地で過ごした。親族には首相や貴族、文学者、芸術家、建築家などがおり、彼女は家庭でガヴァネスから教育を受け、生涯にわたり音楽と美術を愛好した。また、曾祖母は19世紀初頭のフェミニストであるアン・ホイラー（Ann Wheeler）で、1892年に母親と南アフリカを訪れた際、彼女は、著名なフェミニストである作家オリヴ・シュライナー（Olive Schreiner）と会っている。

伝統的な貴族社会を嫌悪して内向的な生活を送っていたコンスタンス・リットンの生活は、1905年に大おぼの遺産1000ポンドをモリスダンス（イギリスの古いフォークダンス）の復興に寄付したことをきっかけに激変した。フォークダンス運動を主導していたメアリ・ニール（Mary Neal）が、過激な女性参政権運動組織WSPU（Women's Social and Political Union）の会計を務めていたエメリン・ペシック＝ローレンス（Emmeline Pethick-Lawrence）と共に、働く少女たちのギルドの運営に携わっていたため、その繋がりですりこんでリットンも投獄されているサフラジェットのもとを訪ねることになった。そして、その経験がリットンを熱烈なサフラジェットに変えた。WSPUのメンバーとなった彼女は、ロビー活動を行い、イギリス各地に出向いて会合で演説した。

他のサフラジェットと同様にリットンも投獄されたが、貴族の娘ということで、すぐに釈放されることが続いた。そこで彼女は1910年、労働者階級の女性に扮装してリヴァプールで抗議活動を行った。投獄され、ハンガーストライキを執行すると、身分を隠した彼女には悪名高い強制摂食が8回行われた。解放された後、リットンはこの経験を会合で語り、そのことが強制摂食の終焉に大きく寄与したと言われている。しかし、このことが原因で彼女は体を壊し、数か月後には心臓発作に襲われ、2年後には脳卒中を起こして体に麻痺が残った。それでも彼女は、声を上げることのできる立場の自分が記録を遺さなければと決意し、左手で『監獄と囚人』（*Prisons and Prisoners*, 1914）を書き上げ、1923年に亡くなった。

このように女性の参政権獲得のために命をかけて闘ったリットンの生涯を描いた劇作品が、ニューナム・カレッジの歴史あるオールド・ラボで、国際女性デーに2回上演された。オールド・ラボは、1879年にニューナム・カレッジに建てられた実験室である。当時、女性は大学の実験室を使うことが認められていなかったため、ニューナム・カレッジは学生や支援者から寄付を募り、この実験室を建設した。オールド・ラボ内には、ウルフの『自分だけの部屋』のタイトルをもじった「自分だけのラボ」（“A Lab of One's Own”）（図版7）というパネルが展示されており、実験室が建てられた経緯が説明されている。

筆者は2016年度、在外研修で客員研究員（Visiting Fellow）としてケンブリッジ大学英文学科でリサーチを行った。その際、英文学科の掲示板で偶然この企画のポスターを見て、チケットを購入し、観劇した（図版8, 9）。公演は昼夜2回行われ、用意された50席のう

ち20席はニューナム・カレッジの学生用、30席は一般向けだった。会場の入り口には上演作品のパネルが数枚飾られていた（図版10）。熱のこもった演技には惜しみない拍手がおくられ、そこには、女性解放のために闘った過去の女性たちに対する感謝と敬意、そしてその闘いをこれからも引き継いでいくという想いが溢れているようだった。

2017年の国際女性デイには、ウィキペディア・エディタソン(Wikipedia edit-a-thon)が行われた。これは、インターネット上の性差別を是正するために、ウィキペディアに著名な女性の項目を増やそうという企画である。ニューナム・カレッジの学生、卒業生、教員、スタッフと、地元の生徒たちを含む一般の人々がこの企画に参加した。カレッジには70名以上が集まり、会社や自宅から参加する人々もいた。2017年3月8日の正午から午後6時までの6時間のイベントだった。ウィキペディアは世界で7番目にアクセス数の多いサイトで影響力が大きい、ウィキペディアのエディターの女性の割合は15%、エントリーの女性の割合は17%未満と少ないため、この企画が立ち上げられた。

2019年3月8日には、ニューナム・カレッジのホームページで、女性のための科学賞サイエンス・サフリッジ・アワード(Science Suffrage Award)に関する記事が掲載された。この科学賞は、1年に2回、優れた女性科学者・エンジニアに授与されるもので、2011年に創設された。受賞者が次の受賞者を推薦するというシステムで、賞品の宝石は受賞者から受賞者へと受け継がれていく。宝石は、デザイナーがロンドン博物館の女性参政権運動に関する展示を観て、サフラジェットの力強さに刺激を受け、制作したものである。記事では、ニューナム・カレッジの教員オーエンズ博士(Dr. Owens)が12部門のうちのひとつの賞を受賞したことが紹介されていた。

このような様々な取り組みから、ニューナム・カレッジが創立当初から現在まで常に女子学寮としての存在意義を意識しながら、細やかな配慮をもって学寮運営を行っていることが分かる。学業に関しては、女子学生が学際的な視点をもって学問に取り組み、その成果を効果的に発信できるように教員を配置している。学生生活に関しては、学生が経済面や健康面で不安を抱かずに大学生活を送れるように手厚いサポート体制を整えている。オックスブリッジは、学生の社交術とネットワーク構築を重視する伝統があるが、ニューナム・カレッジもそれを継承し、学生が異なる専攻の学友やスタッフとも交流できるように工夫している。さらに、学生の卒業後のキャリア形成を視野に入れ、卒業生からの支援を得ながら、学生の職業選択や人生設計の手助けしている。そして、国際女性デイには、女性解放運動の歴史を振り返り、その志を受け継ぐべく、社会と連携しながら、男女平等の社会実現のための企画を立てている。このようにしてニューナム・カレッジは、時代の変化に対応しながら、今日まで女性の学びとキャリア形成を支援し続けている。

4. おわりに

ここまで確認してきたように、ケンブリッジ大学の女子学寮は、現在でも依然として多くの女性たちが様々なかたちで差別を受けているという認識をもち、女子学寮の存在意義と取り組みを、ホームページなどを利用して積極的に発信している。最古の女子学寮のひとつであるニューナム・カレッジは、女子学生への手厚いサポート体制を維持しながら、国際女性デイには、女性史を振り返り、女性が闘い、勝ち得てきたものの重要性を再確認し、その闘いを受け継ぎ、さらに推進していくべく、様々な企画を立てて実行している。共学化が進む中、ニューナム・カレッジが女子学寮として今後どのような取り組みを計画・実行していくのか注目される。



図版1
ニューナム・カレッジ
(筆者 2016年3月8日撮影)



図版2 ケンブリッジ大学セネット・ハウス外観
(筆者 2016年1月28日撮影)



図版3 ケンブリッジ大学セネット・ハウス内部
(筆者 2016年1月28日撮影)



図版4 2016年1月28日に行われた
模擬学位授与式で使用された衣装
(筆者撮影)



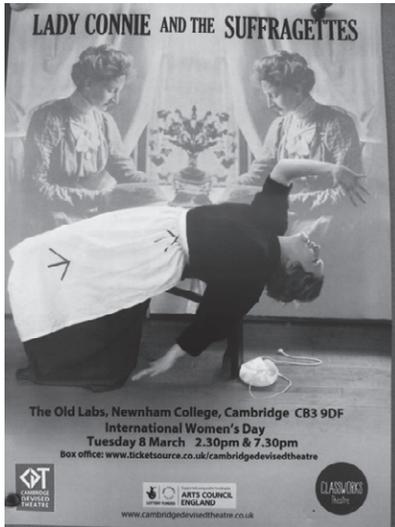
図版5 2016年1月28日に行われた
模擬学位授与式の様子
(筆者撮影)



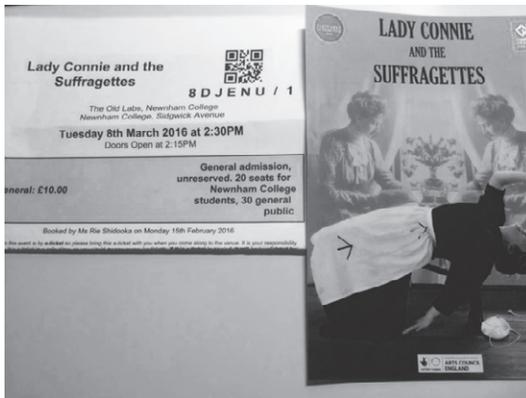
図版6 オールド・ラボ
(筆者 2016年3月8日撮影)



図版7 オールド・ラボ内のパネル
(筆者 2016年3月8日撮影)



図版8
ケンブリッジ大学英文学科の掲示板のポスター
(筆者 2016年2月15日撮影)



図版9 チケット
(筆者 2016年2月22日撮影)



図版10 会場に展示されたパネル
(筆者 2016年3月8日撮影)

注

- 1 ケンブリッジ大学女子学寮の歴史およびニューナム・カレッジの現在の取り組みについては、ニューナム・カレッジの公式ホームページにおいて公開されている情報を参考にした (<https://www.newn.cam.ac.uk/>, Accessed 3 Apr. 2019)。
- 2 マレー・エドワーズ・カレッジの取り組みについては、同カレッジの公式ホームページにおいて公開されている情報を参考にした (<https://www.murrayedwards.cam.ac.uk/>, Accessed 6 Apr. 2019)。
- 3 ルーシー・キャヴェンディッシュ・カレッジの取り組みについては、同カレッジの公式ホームページにおいて公開されている情報を参考にした (<https://www.lucy.cam.ac.uk/>, Accessed 6 Apr. 2019)。

- 4 ウルフは、他にもニューナム・カレッジを舞台にした短編「外から見た女子学寮」(“A Woman’s College from Outside”)を1926年に発表している。この短編と『自分だけの部屋』においてウルフが表明した女子高等教育への想いについては、志渡岡理恵『『外から見た女子学寮』——ヴァージニア・ウルフと女子高等教育』、『下田歌子記念女性総合研究所年報』第5号, 2019, 1-13, 参照。

- * 本稿は、2019年6月5日に実践女子大学渋谷キャンパスで開催された下田歌子記念女性総合研究所第二部門第1回研究会における研究発表「英国ケンブリッジ大学女子学寮とInternational Women’s Day」に大幅な加筆・修正を施したものである。

参考文献

- Adams, Pauline. *Somerville for Women: An Oxford College 1879–1993*. Oxford University Press, 1996.
- Atkinson, Diane. *Rise Up Women!: The Remarkable Lives of the Suffragettes*. Bloomsbury Publishing, 2018.
- Bank, Andrew. “The Making of a Woman Anthropologist: Monica Hunter at Girton College, Cambridge, 1927–1930.” *African Studies*. 68.1 (2009): 29–56.
- Batson, Judy G. *Her Oxford*. Vanderbilt University Press, 2008.
- Bartley, Paula. *Emmeline Pankhurst*. Routledge, 2002.
- Black, Naomi. *Virginia Woolf as Feminist*. Cornell University Press, 2004.
- Crawford, Elizabeth. *The Women’s Suffrage Movement: A Reference Guide 1866–1928*. Routledge, 2001.
- Dyhouse, Carol. *No Distinction of Sex?: Women in British Universities 1870–1939*. UCL Press, 1995.
- Fernald, Anne. *Virginia Woolf: Feminism and the Reader*. Palgrave Macmillan, 2006.
- Gan, Wendy. “Solitude and Community: Virginia Woolf, Spatial Privacy and *A Room of One’s Own*.” *Literature and History*. 18.1 (2009): 68–80.
- Hamlett, Jane. “‘Nicely Feminine, Yet Learned’: Student Rooms at Royal Holloway and the Oxford and Cambridge Colleges in Late Nineteenth-Century Britain.” *Women’s History Review*. 15.1 (2006): 137–161.
- Housego, Molly and Neil Storey. *The Women’s Suffrage Movement*. Shire Publications, 2012.
- Jenkins, Lyndsey. *Lady Constance Lytton: Aristocrat, Suffragette, Martyr*. Silvertail Books, 2018.
- Lemaster, Tracy. ““Girl with a pen”: Girls’ Studies and Third-Wave Feminism in *A Room of One’s Own* and “Professions for Women.”” *Feminist Formations*. 24.2 (2012): 77–99.
- Lytton, Constance. *Prisons and Prisoners: Some Personal Experiences*. Broadview Press, 2008.
- Martin, Jane and Joyce Goodman. *Women and Education, 1800–1980*. Palgrave Macmillan, 2004.
- Park, Sowon. S. “Suffrage and Virginia Woolf: “The Mass behind the Single Voice?”” *The Review of English Studies*. 56.223 (2005): 119–134.
- Phillips, Ann, ed. *A Newnham Anthology*. Cambridge University Press, 1979.

- Purvis, June and Sandra Stanley Holton, eds.. *Votes for Women*. Routledge, 2000.
- Robinson, Jane. *Bluestockings: The Remarkable Story of the First Women to Fight for an Education*. Viking, 2009.
- Sellers, Susan, ed. *The Cambridge Companion to Virginia Woolf*. Second edition. Cambridge University Press, 2010.
- Shils, Edward and Carmen Blacker, eds. *Cambridge Women: Twelve Portraits*. Cambridge University Press, 1996.
- Solomon, Julie Robin. "Staking ground: the politics of space in Virginia Woolf's *A Room of One's Own and Three Guineas*." *Women's Studies*. 16 (1989): 331-347.
- Thane, Pat. "Girton Graduates: earning and learning, 1920s-1980s." *Women's History Review*. 13.3 (2004): 347-361.
- Vickery, Margaret Birney. *Buildings for Bluestockings: The Architecture and Social History of Women's Colleges in Late Victorian England*. Associated University Presses, 1999.
- Woolf, Virginia. *A Room of One's Own and Three Guineas*. Oxford University Press, 2015.
- 堀内真由美『『男女共学』をめぐるイギリス・フェミニストの議論』『季刊女子教育もんだい』第63号(1995): 92-96

(しどおか・リエ／下田歌子記念女性総合研究所 兼務研究員・文学部英文学科 教授)

Women's Colleges of the University of Cambridge and International Women's Day

SHIDOOKA Rie

This paper examines the policies and practices of Newnham College, one of the oldest women's colleges at the University of Cambridge. Newnham and the other women's colleges—Murray Edwards and Lucy Cavendish—have made various efforts to redress persisting gender inequality. Considering that many women continue to be treated unfairly and that there is a need for a college that focuses specifically on women's learning, these colleges provide their students with academic, pastoral, and financial support. In addition, their alumnae guide current students in finding work and choosing a career.

Newnham College also propagates gender equality via its homepage. It presents accounts of the projects carried out on International Women's Day. For example, to mark Women's Day in 2017, it held a Wikipedia edit-a-thon to make the Internet less sexist by creating profiles of eminent women. Furthermore, it founded the Woolf Essay Prize, which is open to girls aged 12 in UK schools and designed to give them the opportunity to think about gender equality. In 2011, it established a Literary Archive, collecting rare books, letters, drafts of published work, memoirs, and photographs to inspire students to write.

Through such initiatives, Newnham College continues to provide students with an academic, active, and stimulating environment, and supports them in multiple ways. It has thus produced independent women, having helped them to prepare for work and life.